
Devil May Cry Kill The Shadow

橘 疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Devil May Cry Kill The Shadow

【Nコード】

N2301D

【作者名】

橘 疾風

【あらすじ】

大剣と二丁の連射銃がトレードマークのデビルハンター、ダンテ。そんな彼の元に、奇妙な手紙がやって来る。「ハーフムーンシティの光を、闇から守って下さい。報酬はたっぷりです。ハーフムーンシティの母より」手紙にはそう書いてあり、悪魔の気配を感じ取ったダンテは、ハーフムーンシティに向かう事に。そこで出会ったのは、母親を捜す少女。そして、少女を狙う無限数の悪魔達。ダンテは無事少女を守り、街にはびこる悪魔を倒せるのか!?

PROLOGUE : Beginning(前書き)

どうも、橘です。

デビルメイクライを知ってる人も、知らない人も、これから知ろうとする人も、楽しめる作品を書けたらいいなと思います。

感想・批評は作者の頭のエネルギーになります。よろしくお願いします。

PROLOGUE : Beginning

そいつらは、まさに悪魔と呼べる外見だった。

黒と紫が混じったグロテスクな体は、巨大で、恐ろしかった。

狼が無理に二本足で立っているかのような、奇妙でおぞましい生物は、鉄さえも砕けそうな鋭い牙をむき出しに、夜空に向かって咆哮した。

目は真っ赤で、飢えており、口の中も血のように赤い。

爪は鋭く長く、その体は人間の何倍もある大きさ。

まさに、悪魔だ。

「あつ……あ」

少女は体から力が抜けるのを感じた。

倒れ込むようにして、建物の裏の壁を背に、座り込む。

身動きができない。

動いたら、すぐにでも殺されそうだ。

バーの路地裏で、五体の悪魔が、彼女を囲むようにして睨んでいた。

睨んでいる間にも、そいつらはジリジリと少女に近づいている。

まるで、獲物に手を出すタイミングを待っているかのように。

少女の目から涙がこぼれた。

恐怖で体が震え、息も満足に出来ない。

突然、悪魔の一体が前に飛び出した。

少女の方へと。

もう駄目だ、死ぬんだ、と少女は目を閉じた。
暗闇の中で、体が痛みに耐えようと必死に力を込めているのが分かる。

始めに聞こえたのは、鋭い音。
そして、液体が噴出しているかのようなドバツとした音と、天も揺るがすような轟音。
けど、痛みは感じない。

ゆっくりと目を開けると、信じられない光景が広がっていた。

返り血を浴びたような色のロングコートを羽織り、片手に大剣を持った銀髪の男。
そして、胸から血を噴き出す悪魔。

「大丈夫か？」

男が振り向いた。銀髪に血がかかっている。

悪魔が、血が吹き出る胸を手で押さえた。
残りの悪魔達が、動揺する。
が、一体が男を狙って飛び出した。
男はそれに気付かず、ずっと少女の方を向いている。

「あ、あぶな……」

かすれた声で忠告するが、男は無表情でこっちを見るだけ。

そして、背後の悪魔を、上に蹴り上げた。

悪魔が蹴りをもろに受け、吹っ飛ばされる。

まるで、ゆっくりと流れる動画を観ているようだ。

宙に舞う悪魔。

そして、銃を構える銀髪の男。

「ライブを始めるぜ」

男がそう呟いた直後、彼の銃から銃弾が連射される。

そして、宙を舞う悪魔の体に、ぶち込まれた。

「グ、グウウ……」

悪魔の口から苦痛の声が漏れる。

血があたりに飛び散り、少女の体にもかかった。

冷たい血だった。

突然、時の流れが元に戻るような感触がした。

撃っている間にも二体の悪魔が男の方へと突っ込む。

男が大剣を持ったまま体を回転させると、二体の悪魔の体にサッと浅い傷が出来た。

そして、大剣を一体の悪魔の腹へとぶつ刺す。

「グウウ……！」

悪魔の口から血が溢れ出る。

男は大剣を勢いよく引き抜くと、自分の背後にいる悪魔に気付いた。

「ふん」

男は鼻で笑うと、なんと、バク宙回転した。

宙を舞う男は、まるでさっきの悪魔だ。

ただ違う所は、男はいつの間にか両手に銃を持っている事だ。

宙を舞う間にも、男は悪魔に銃弾をぶち込む。

さっきと立場が正反対だ。

血が飛び散るが、男は気にせず、最後の悪魔を見つめた。

「ググウウウ……」

悪魔が低く唸った。

逃げずに戦う事にしたらしい。

ダッ、と一体と一人が距離を縮める。

悪魔は牙と爪を構え、男はさっきの大剣を構えている。

そして、大剣が悪魔の頭に突き刺さった。

「ガウ……グウゲ」

口と頭から血が、滝のように噴き出す。

悪魔は力を失い、倒れ込んだ。

狭い路地裏に五体の悪魔。

血を拭き取る男。

壁を背に座り込んでいる少女。

血が辺り一面にべっとり付いている。

話は三日前に戻る。

1 / DANTE : The Moon (前書き)

どうも、橘です。

ダンテ編の1が始まりましたね。今回はアクションシーンがありませんでした。代わりにダンテがピザを食べているシーンは…いらない？ ごめんね。ま、これからもよろしく。(今冬休み)

1 / DANTE : The Moon

“ Devil May Cry ”

そう綴られたネオンは、昼間なので光ってない。

事務所にははなかなかの大きさを誇るこの建物。

造りは素晴らしく出来ているのに、ここに住む一人の男のせいで、中はピザの箱やらピザの箱やらピザの箱で溢れ帰っている。

そして、事務所の奥の方の大きな机の上に、足を組む男が一人。

銀髪で、血の如く赤を基調としたロングコートを羽織り、片手でピザの箱を持ち、片手でピザを食べる。ピザが好物なのは一目見ただけで分かる。

「ダンテさーん」

事務所の扉を開けたのは、茶髪の若者。ピザの箱を二箱抱えている。

「ピザですよ…… ってもう食べてるんすか!？」

「そこに置いとけ」

ダンテと呼ばれた男が促す。

「ダンテさーん、『そこに置いとけ』じゃないっしょ？ ツケを払って下さいよ、ツケ」

若者はピザの箱を近くのソファの上に置くと、ダンテに向かって指を振る。

「どれだけたまってるか分かってるんですか？」

「わかんね」

ダンテは最後の一口を口に入れると、腕を頭の後ろで組んだ。

「いいから置けよ。俺は客だぞ？」

「客って言うのはお金を払ってくれる人を指す物だと思ってましたけど？」

「なげーよ」

「……………」

どうやら若者は怒りをこらえているらしい。

「帰ります！ ツケは来週まで！！ 分かった！？」

派手な音を立て、扉を閉める。

ダンテは気にしたようでも無く、ソファの上のピザを見つめて一言。

「あの野郎……ストロベリーサンデーを忘れやがった！！」

肩をワナワナと震わせ、神に誓った。

「ツケなんて絶対はらわねーぞ！」

その声は決意に溢れ、同時に怒りに燃え上がっていた。

ダントは椅子から立ち上がると、ソファに向かってコツコツと歩いた。

先ほどまでの怒りはどこかへ飛んでいったみたいで、ソファに倒れ込み、昼寝の準備を始める。目を閉じて二秒。

「ダントさーん、お届け物です！」

扉の外から大声がする。

ダントは小声で悪態をつきながら、扉を勢い良く開けた。

「ダ、ダ、ダントさ、さん、お届け物です」

そこには震えた声で小包を差し出す男。

何故声が震えているのかと言えば、簡単。

睡眠を邪魔されたダントの顔は、まるで鬼のようだからだ。

「……どうも」

皮肉っぽい声を出して、素早く小包を取り、扉をすぐ閉める。机の方へ歩きながら、包みを開けた。

「ん？」

中に入っていたのは、一枚のボロボロの紙。椅子に座りながら、早速読み始めた。

「ダントへ」

ハーフムーンシティの光を、闇から守って下さい。報酬はたっ

ぷりです。ハーフムーンシティの母より』

紙の下の方には、竜のシルエットのような絵も描かれている。

「何だこれ？」

眠気はもう無かった。
もう一度読み返す。

「何なんだこれ？」

意味が分からない。

闇って何だ？

光って？

ハーフムーンシティ？

いや、薄々気付いていた。

「闇ってのは、悪魔か……」

そう、悪魔。

「だが光ってなんだ？」

分からない。

分からないけど、なぜかダンテの背中に悪寒が走った。

「く、くく……。面白い。最近体がナマってきた所だ。久しぶりにR指定ライブでもするか……」

ダンテはそばのギターケースを手に取り、背負った。
そして愛用の二丁の銃、エボニーとアイボリーを持っている事を確認し、扉に向かって早足で歩く。

扉の取っ手に手を伸ばした瞬間、何者かがダンテより先に開けた。

「うおっ」

危うく扉にあたりかけ、ダンテは向こう側の人物を見た。

ダンテもよく知っている、仕事を持って来る、律儀な情報屋。
モリソンだ。

「ダンテ？ お前何してる？」

「ふん」

ダンテは鼻先で笑うと、例の紙を差し出した。
モリソンは素早く読む。

「何だこれは？」

「わかんねえよ。でも俺の推測だと、多分、闇つてのは……」

「悪魔か」

ダンテが頷く。

「つまり、ハーフムーンシティのとある人物を護衛する、か……」

モリソンが神妙な顔で呟いた。

「で、その格好は何だ？」

「だから、行くんだよ。ハーフムーンシティに」

モリソンが驚愕した。

「へえ。普段ズボラなお前が、自分から行動する何て……。何が目的だ？」

「なんだかわからねえけどよ、ただ事じゃねえような気がするんだよ」

ダンテが微笑を浮かべる。

「ド派手なライブになるよーな……」

今度はモリソンが微笑を浮かべる。

「くくく。ダンテ、西の方へ歩け。そしたら馬車が現れる。それに乗れ。きっとハーフムーンシティに連れてってくれるさ」

「どうやっ……」

「その代わりに、帰って来たらツケを全部はらう事」

モリソンが確認すると、ダンテは聞こえなかったフリをして歩き出した。

その背中を見て、モリソンは溜息をついた。

……
……
……

何か別の移動手段を選ぶんだった、とダンテは後悔した。
西の方へ歩いてても、丘が続くだけ。

どこを見渡しても、建物はない。

馬車がどこに出て来るのかも分からない。

大体、モリソンには車があるはずだ。

馬車なんて手配せずに、車を貸して欲しい。

ダンテはもう、数えきれない程溜息をついていた。

丘の芝生の上に座っているのだ。

丘をずーっと歩いていても、芝生と道が続くだけだから、ここで待ち伏せでもしようかと思ったが…。

「いつ来るんだよ……」

もう二三時間待っている。

日はもう沈みかけていて、夕日の光がダンテを照らした。

突然、パッカパッカという軽快な音が聞こえて来た。

振り向くと、白馬と馬車が、こっちに近づいて来る。

ダンテはイライラしながら立ち上がった。

ギターケースとエボニー&アイボリーを持っている事を確認して、立ち止まった馬車に近づく。

馬車には中年の男しか居なかった。

「てめえがダンテかい？」

低い声で男が尋ねて来る。

「そうだ。ハーフムーンシティまで頼む」

「了解」

馬車の荷台に乗り込むダンテを見た男は、早速馬を動かせた。

……

……

…

何時間か時間が過ぎ、ようやく男がダンテに告げた。

「おい、あと五分もすれば着くぜ」

男のくぐもった声が聞こえると、荷台から飛び降り、男にもういいと呟いた。

「いいのかい？ 五分つったって……」

「いや、もういい。ありがとよ」

ダンテは男に金を握らせると、歩き出した。

「おい！」

背後から男の声が聞こえて来る。ダンテは前を向いたまま「なんだ

「？」と尋ねた。

「た、ただの噂なんだがな」

さすがのダンテも気になる。

「この街は、謎の化けもんに支配されちまってるらしいぜ」

それを聞くと、またもや背中に悪寒が走った。

月明かりに照らされたダンテの顔は、悪魔に飢えていた。

1 / DANTE : The Moon (後書き)

タイツオンさん、感想、ありがとうございます。はい、僕的にはデビルメイクライのアニメを意識して小説を書いているので、指摘されるのは大変嬉しいです。これからもよろしく願います。

まい花さん、大変自信ができました。ありがとうございます。
これからも橘のデビルメイクライを読んでもくれると嬉しいです。表現力豊かですか、それは良かった。

エボニー&アイボリーさん、プロローグでの活躍、ありがとうございます。
います。

これからもダンテと共に居て下さいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2301d/>

Devil May Cry Kill The Shadow

2010年10月10日18時17分発行